

巻頭言

なぜいま国際教養大学なのか

『歴史と未来』第二十七号刊行にあたって

中嶋 嶺雄

私の東京外国語大学退官という事情もあって、本誌第二十六号が出てから、すでに三年半の歳月が過ぎている。その号には、「国際社会の変動と大学」と題する東京外国語大学での私の最終講義も載せて頂いているが、この間には私自身にも思いがけない変化があり、現在私は、二〇〇四年四月に秋田県に開学した公立大学法人国際教養大学 (Akita International University, AIU) の理事長・学長として、全く新しい大学の運営と教育に携わっている。

昨夜は秋田の伝統的な夏祭りである「竿燈祭」が始まり、市の目抜き通りに二百数十本の竿燈が立ち並ぶ光と音の壮大な饗宴となった。AIUの学生たちも加わっているのです、私も法被姿で隊列を先導した。『秋田魁(さきがけ)新報』が大きく取り上げていたけれど、AIU

の竿燈にはスウェーデンやドイツなどからの留学生やアメリカ人の教授も加わっていて国際色が豊かであり、また竿燈を見て帰国するモンゴル、台湾、アメリカ、カナダなどの留学生は、涙ながらに私の手を握って別れを惜しんでいた。

人生とはまことにわからないもので、私があのまま東京外国語大学の学長を続けていたとしたら、このような感激も人生の新しい挑戦での苦勞や喜びも体験できなかったであろう。

二一世紀はまさにグローバル化の時代であり、それを避けて過ごすことはできない。国境がますます低くなり (borderless)、ITの発達によって世界が同時に進行する (simultaneous) 新しい時代の到来だといえよう。

だからこそまた私たちにとっては、日本人としてのアイデンティティーが探求されなければならないのだ。

しかし、日本の大学は、その数が現在、四年制大学だけで七二三校にもなっているにもかかわらず、こうしたグローバル化の時代に真に対応できる組織や教育プログラムを十分そなえているとは到底言えない。これでは、二一世紀の高度な知的基盤社会 (highly knowledge based society) に生きる人材をわが国で育成することはきわめて困難である。そのようなグローバル化の時代を日本が積極的にリードしていくためにも、国際社会で十分に活躍できる人材が是非必要であり、多くの日本国民にとっても、グローバル化に対応する高等教育を受けることがきわめて重要だと私は従来から考えていた。理系・文系いずれを選ぶにせよ、これからの時代には外国語、とくに英語によるコミュニケーションがますます重要になることは疑いなく、さらに母語と英語に加えて出来ればアジアの言語も学ぶといった「三言語主義」を私は唱道している。

国際教養大学は、このような時代の要請に応えるべく、これからのグローバル化の時代に挑戦する大学として構想し、全くの白紙に線を引くようにして開設された。秋田県の寺田典城知事をはじめ、多くの方々のご支援や助言も大変有益であった。

「授業はすべて英語で」「一学年定員一〇〇名(二〇

〇六年度からは一三〇名)の少数精鋭で、新入生は全員が寮生活」「TOEFL (PBT) 五五〇点以上での一年間約三〇単位取得を目指す海外留学が義務」「全世界に公募した優秀な教員は大半(約六〇パーセント)が外国人」「アジア地域のみならず欧米からの留学生も多いキャンパスは常に異文化空間」「図書館は二四時間オープン」「教職員は三年の任期制と評価による年俸制」など、これまでの大学にはなかった様々な特徴を打ち出したの開学であった。

この大学の基本的な性格は、「国際教養」という新しいコンセプトを大学名に掲げたことにも示されているように(わが国の国公立大学はすべて地名や地域名を大学名に冠している)、教養教育 (Liberal Arts Education) を重視した、しかも実学的な大学であることである。一九九一年の大学設置基準の大綱化以来、学部教育(学士課程)から教養教育が消え去り、十分な知識も身につけずに初めから専門教育の小部屋に閉じ込められてしまっている弊害をなくすために、一年間の留学経験も含めて学生が広く深く学び、主体的に自己発見できるようなカリキュラムづくりに努めてきた。学生は入学直後のTOEFLによる能力別クラス編成でEAP (English for Academic Purpose, EAP) の英語集中プログラムに身を置き、次の基盤教育の段階では、本物の教養教育の一環として、国際的ヴァイオリニストの渡辺玲子さ

ん(特任助教)に「芸術・芸術論(音楽と演奏)」を学ぶこともできるといった授業編成になつていて、私自身も「グローバル・スタディーズ概論」と「東アジア研究概論」を講義している。

こうした構想で立ち上げた大学であったが、当初は果して優秀な教職員が集まるだろうか、学生が来るだろうか、といった懸念が当然一部にはあったようである。しかし教員を全世界に向けて公募したところ、第一期一五名の枠になんと五七一名の応募があった。受験生は大学入試センターを開学初年度は使えないこともあって、後期日程は四五・二倍という大変な競争率で、全国すべての都道府県から受験生が押しかけた。現在は三年目であるが平均倍率は一般選抜入試で約一五倍、推薦入試でも五倍強の競争率で、全国から優秀な学生が入学している。主要予備校の入試難易度データでは公立大学のトップ、国立大学と比べても文系では北海道大学や東北大学を凌いで京都大学や一橋大学とほぼ並んでおり、地方の新設大学では起り得ない奇跡だと受験専門家は驚いている。

国際教養大学のもう一つの特色は、TOEFL600点以上を採用条件にしている大学職員がきわめて優秀なことであり、大学の意思決定にも加わる彼らの熱意が大学運営に大いに役立っている。

もとより、まだ卒業生も出してない段階で大学の評価は不可能であり、国際教養大学の試練はまだまだこれ

からだと言えようが、モチベーションが高く本当によく勉強する学生諸君の成長とともに、この大学は、日本と世界の高等教育のあり方を変えるバイオニア的役割を担うものと確信している。最近では早稲田大学、富山国際大学、上智大学などのように「国際教養」を学部名とする大学も増えつつあり、また国際教養大学と国際基督教大学(ICU)、立命館アジア太平洋大学(APU)、早稲田大学などとの「国際教養」を機軸にした連携も始まっている。

広大な秋田杉の森に囲まれ、学長室から一分も歩くと春には美しい水芭蕉の群生が見られる国際教養大学は、羽田空港との間に一日八便を有する秋田空港から車で五分といった便利な環境にある。国際会議の出席者や留学生は秋田―関西空港便や秋田―ソウル便を利用して世界につながっていて、この点では地方の時代の本格的な開幕をも告げていると言えよう。

中嶋ゼミの会の会員をはじめ本誌の読者の皆様には、是非来学していただき、授業やキャンパスの雰囲気を見学していただければと願っている。